

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520498

研究課題名(和文) ハワイ日系人によるコード切替えに関する研究

研究課題名(英文) A study on code-switching by people of Japanese descent living in Hawaii

研究代表者

島田 めぐみ (Shimada, Megumi)

東京学芸大学・留学生センター・教授

研究者番号：50302906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)： 米国ハワイ州ヒロ市で収集した日系人の発話データを対象にコード切り替えに関し分析を行った。世代別に分析を行った結果、2世と3世は方言的特徴が見られ、接続詞や応答詞など機能語の借用語が多いという共通点が観察された。また、「日系人と日本人との間の会話」と「日系人同士の会話」の間の違いについて分析を行った。その結果、「日系人同士の会話」のほうが日本語と英語の間で頻繁にコード切替えが起き、ハワイクレオール英語も多く用いられていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： I analyzed how code-switching was used based on the verbal data of people of Japanese descent collected in the city of Hilo, Hawaii, USA. Data analysis by generation revealed a dialectal characteristic in the second and third generations: they used loanwords of function words such as conjunctions and response words on a frequent basis. Additionally, I analyzed the differences between "conversations between those of Japanese descent and the Japanese" and "conversations among those of Japanese descent." The results revealed that Japanese/English code-switching occurred more frequently in "conversations among those of Japanese descent" and that Hawaiian Creole English was used more commonly.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：社会言語学 ハワイ 日系人 日本語 英語 ハワイクレオール 言語切替え

1. 研究開始当初の背景

米国ハワイにて日系人により使用される日本語は、英語、ビジン英語、ハワイ語などと接触した結果生まれたものである。現在この言語を使用するのは、主に日系二世である。データの分析やさらなるデータの収集には、日系二世の協力が不可欠であるが、多くの日系二世は70歳を越えており、今後さらに調査が困難になることは明白であり、早急に調査を進めることが緊急課題となっている。

研究開始当初、ハワイ日本語に関する研究は、語彙の特徴を記録するにとどまっていた(井上1971、比嘉1974、黒川1983、島田・本田2007、島田・本田2008)。これらの研究のうち話しことばを分析したもの(黒川1983など)の多くのデータはインタビュー調査にて得られている。それゆえ日本人研究者との会話データが分析対象となっている。しかし、日系人同士の会話は、英語やクレオール英語やハワイ語とのコード切替えが頻繁に観察され、日本人との会話とは明らかに異なる傾向がある。すなわち、ハワイの日本語を解釈するには、対話者というベクトルを考慮し、日系人同士の会話も分析対象とし、その上でさまざまなレベルにおけるコード切替えの実態を明らかにする必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、米国ハワイ州ヒロ市在住の2言語使用者である日系二世の発話データをもとに、以下の点を実現することにある。

(1)語レベルから句や文レベルにいたるさまざまな段階における、日本語と他言語(英語、クレオール英語、ハワイ語)の間のコード切替えの実態と切替え行動の要因を明らかにする。

(2)上記結果について、a)日本人との会話、b)日系人同士の会話では、どのような相違点があるか比較検討する。

(3)ハワイ日系人の日本語はまとまった形で公開されていないため、テキスト化したデ

ータと一部の音声データを公開する。

3. 研究の方法

(1)米国ハワイ州ヒロ市にて期間中計6回の調査を行い、日系二世と三世そして日本で教育を受けた帰米二世あわせて16名から発話データを収集した。それまでに収集したデータをあわせて、文字化作業を行い、コード切替えに関し分析した。

(2)上記(1)の結果に関し、「日系人と日本人の間の会話」の結果と「日系人同士の会話」の結果を比較検討した。

(3)上記(1)の資料のうち、協力者から許可を得たデータを印刷した。また、音声データの公開方法を検討した。

4. 研究成果

(1) 文レベルのコード切替え

日系人の発話が日本語文、英語文、日本語と英語が混じり合っている混交文(例:a)のいずれであるかを分析し、使用率を計算した。その結果、日系人同士の会話では、約7割が英語文であった。一方、日本人との会話では、7割から多い話者ではほぼ100%が日本語文であった。下記のような日本語と英語が混じり合っている文を使用する割合は、話者により差があるが、0%から約7%であった。

a. だから、seed だけをとって、she going save for me.

(2) 句レベルのコード切替え

混交文は、日本語か英語か容易に判断できない文であり、aのように句レベルでのコードスイッチングと言えるが、日系人同士の会話中に観察されることが多かった。その中で、b、cのように、主節が英語、従属節が日本語という構成の文が多い。そのほか、引用部分だけ、日本語あるいは英語というものもあった(d)。

b. 近いな思ったら、I stay bang him.

c. And then yeah, him の age だったらね、hard to find the younger girls.

d. I say、えーが多いね。

(3)語レベルのコード切換え

英語からの借用語

英語からの借用語は、全データを通して、数量や時にかかわる語、親族名称が観察された。帰米二世以外では、応答詞、接続詞の借用語も多かった。

数量に関する語では、“one 飲む” “one more” “one time” “one copy” “one pound”など、“one”の使用が目立った。一方、「イチ」「ひとつ」のような日本語の使用は、日本人との会話中に「1枚」「ひとつ」と2例観察されたが、日系人同士の会話では観察されなかった。日本語は、「イチ」「ひとつ」のように和語と漢語の使い分け、「イチマイ」「イッポン」など助数詞の体系が複雑である。そのため、より単純に使用できる“one”などが多用されるのではないだろうか。

時を表す表現としては、“seventeenth” “ten years” “ten days”などが観察された。発話データで曜日が言及された回数は多くなかったが、日本語で表現されたのは一例のみで、ほかはすべて英語で表現されていた。そのほか、sometime あるいは sometimes が観察された。

親族名称は、“wife” “husband” “daughter” “father-in-law”など多くの例が見られた。「お父さん」「親父」「娘」と日本語を使う話者もいたが、多くはなかった。先行研究で指摘されているとおり、親族名称は英語からの借用が多いことが確認できた。

“yeah” “no”の応答詞が発話データに多く観察された。“yeah”と“no”など応答詞は、多く観察されているが、“yeah”をほとんど使用しない者もいた。“yeah”を使用しない者は、肯定的応答詞として「そう」を使用している。また、肯定の応答詞として、“ye”(イエ)を多く使用している者もいた。“yeah”から派生したのではないかと推測できるが、さらに検討が必要である。全データを通じて、“no”に相当する日本語「いいえ」「いえ」「いや」

は観察されなかった。

接続詞も多く観察された。日本語文の割合が高い帰米二世では観察されなかったが、二世では、“but” “so” “because” “and then”などが使用されていた。

動詞は“adapt する” “pay する”のようにサ変複合動詞として使用される。“don't care”は多く借用されていたが、「です」を伴って使用されるか、「です」「だ」が省略される形で使用されていた。

e. あ、私の娘でもね、don't care ですよ、もう。

ハワイ語からの借用語

ハワイ語からの借用語は、“haole”(白人) “luna”(監督) “pau”(終わる)の3語のみであった。

f. 土人を luna に使うと、日本人を嫌うね。

g. I said pau, oh, they didn't know what is pau.

ハワイクレオール英語からの借用語

ハワイクレオール英語からの借用語は、“bumbai”、“kaukau”、“kine”が観察された。“bumbai”は、英語“bye and bye”が変化したもので「後で」という意味を表す。hのように日本語文、iのように英語文でも使用されていた。

h. どうせ bumbai したらまたよごれるだろう。

i. Bumbai he going quit, you.

“kaukau”は、音の特徴からハワイ語と考えている者が多いが、ハワイ語の辞書に記載はなく、語源は中国人が使用していたピジン英語の“chow chow”とされている(Sakoda & Siegel 2003:5 ほか)。日常会話では比較的耳にする語であるが、本会話データでは、次のように引用として使用されていた。

j. Sometimes ね、ご飯の時、呼ぶでしょう、子どもの遊ぶ時、半分日本語、半分英語で、「hey, come home, kaukau ご飯」って、言うんです。

ハワイクレオール英語を代表する語として“kine”（カイン）があるが、今回の発話データでも、“da kine”（あれ）“this kine”（これ）“small kine”（小さいの）などのように修飾語を伴い使用されていた。語源は“kind”と言われ、“da kine”がもっともよく聞かれる。

“no”を“can”“like”“have”などの前に付して、否定を表す例は、日系人同士の会話における英語文で観察された。

k. People no like him that's why.

l. I no see her.

ハワイクレオール英語“bambai”と“no”を伴う否定形は、日系人同士の会話でしか観察されなかった。また、“no”を伴う否定形は、英語文のみで使用されていた。

翻訳による造語

翻訳による造語は、本データでは“second cousin”（はとこ）を翻訳借用した「にいとこ」，“third cousin”（はとこの子）を翻訳借用した「さんいとこ」が観察された。また、“first cousin”（いとこ）を「first いとこ」と混種語として使用していた。

ハワイ日本語では、形容詞に「ナンバーワン」をつけて「もっとも」という意味を表す用例がある。今回のデータからは“number one guide”（一番いい旅行ガイド）の用例が観察された。また、「2番」の意味で“number two”が使用される例もあった。“number one”“number two”自体は造語ではないが、形容詞を伴った使用は、日本語からの翻訳をもとにしているのではないかと考えられる。

方言の使用

一世の出身地は、広島県がもっとも多く、山口、熊本、沖縄が続く。比嘉（1974:180）は広島・山口方言の特徴の一部をとらえ、それをひんぱんに使うことによって、ハワイ日系社会における広島・山口方言の共通語的な地位を認めるようになったと分析し、その特徴は、間投助詞「ノー」と接続助詞「ケン」

または「ケー」を使用すること、格助詞「ト」を省略することであるとしている。比嘉

（1974:181）は、上記のような日本語は、あと10年もすれば聞けなくなるだろうと予測しているが、今回のデータからは、これらの方言的表現が多く聞かれた。

本会話データで観察された広島・山口方言は、ウ音便（m）打ち消しの「ん」（n）アスペクト表現「とる」（o）引用形式の「と」の脱落（p）、終助詞の「のぉ」（q）接続助詞の「けー」（r）、語彙としては「おご」「つむ」「みやすい」が観察された。

m. よかった言（ゆ）うてもらいたんですよ。

n. ticket 取りにこんかった。

o. ここに書いとる。

p. あんたにあげよう思ってるんだけど。

q. その doll があつたのぉ、before.

r. もう、he もう白髪になつとるけー。

世代による特徴は見だしにくいだが、帰米二世からはまったく方言的特徴が観察されなかった。また、日系人同士の会話と日本人との会話では明らかな差が見られる。日系人同士の会話では方言的特徴が多く観察されたが、日本人と話すときは方言の使用が減少する。

(4) 対話者による差異

日系人同士の会話と日本人との会話について、日本語文の割合を比較すると、日本人との会話では7割程度から10割程度までであったのに対し、日系人同士の会話では3割に満たない。また、混交文の割合は、必ずしも日系人同士の会話だけに表れるわけではないが、話者AとBに注目すると、AとBが日本人を交えて話している時には混交文は現れなかったのに対し、AとBのみで話しているときには混交文が観察された。混交文は、日系人同士の会話でより出現すると言えるだろう。

日本語文における英語からの借用語を見ると、人称代名詞（he、she など）は、日系

人同士の会話のみで観察された。また、日系人同士の会話では、日本語文においても英語文においてもハワイクレオール英語の特徴が見られた。日本語文では、“bumbai” “kaukau” の使用のみであったが、英語文では、“no can” “no like”などの否定表現が観察された。

(5) 世代による差異

二世、帰米二世、三世のうち、もっとも日本語を話す割合が高かったのが帰米二世であった。協力者は、学校教育を日本で受けており、流暢に日本語を話す。また、量だけではなく質的にもほかの日系人とは異なる傾向があった。英語からの借用語も少なく、また、接続詞、人称代名詞、応答詞の機能的な語の借用語はなく、名詞や動詞など内容語の借用語がわずかにあるのみだった。また、方言的な特徴は見出せなかった。二世と三世は個人差はあるものの、日本語文における英語要素が含まれる割合はいずれの話者も帰米二世の2倍以上であった。二世と三世が帰米二世とは異なる特徴として、方言的特徴が見られる、接続詞や応答詞など機能語の借用語に共通点が多いなどの特徴があった。

(6) 資料の公開

現在ハワイ日本語を使用するのは主に日系二世であるが、年々高齢化が進み、資料の収集が難しくなっている。そこで、文字化した発話データを冊子としてまとめることとした。発話データの印刷について許可が得られた8人の発話データから、特に内容面についても貴重な資料と考えられる部分を選んで報告書として印刷した。

また、音声データの公開も目的としてあげていたが、音声データでは協力者の匿名性が確保できないため、音声データについては非公開という形で限定的にCDを作成した。

(7) 今後の展望

ハワイの日系人の会話データをもとに分析したところ、世代による違い、対話者によ

る違いなどが明らかになった。特に日系人同士の会話を分析できたことは意義が大きい。日系人同士の会話は、英語、日本語、ハワイクレオール英語が頻繁に交替し方言の使用も増すため、文字化作業が難しく、すべての会話の分析が終了できなかった。今後、さらに分析を進め、さらに構造や要因を検討する必要があるが、本研究で得られたデータは今後も貴重な資料となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

島田めぐみ・高橋久子・本田正文、ハワイにおける日本語語彙の共通語化、東京学芸大学紀要総合教育科学系、査読無、第65集、2014、505-516

http://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/134711/1/18804306_65_61.pdf

島田めぐみ、ハワイ日系二世の言語切替えに関するケーススタディ、東アジア日本語教育・日本文化研究、査読有、第15号、2012、137-148

島田めぐみ・高橋久子、ハワイに残る日本語 -「おご」を一例に-、東京学芸大学紀要人文社会科学系、査読無、63、2012、81-88
http://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/125472/1/18804314_63_03.pdf

〔学会発表〕(計1件)

島田めぐみ、ハワイ日系人による言語切替えの実態、東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2011 年度国際学術発表大会、パリ、2011.11.4

〔図書〕(計1件)

島田めぐみ、ハワイ日系人の日本語、オセアニアの言語的世界、溪水社、2013、137-179

〔その他〕

島田めぐみ、ハワイ日系人によるコード切替えに関する研究 ハワイ日系人の発話資料

平成23年度～平成25年度科学研究補助金 基
盤研究(C)、2014

6 . 研究組織

(1)研究代表者

島田 めぐみ (SHIMADA, Megumi)
東京学芸大学・留学生センター・教授
研究者番号：50302906

(2) 研究協力者

本田 正文 (HONDA, Masafumi)
ハワイ大学ヒロ校・Japanese Studies and
Linguistics・准教授